
奏でる音の色～詞に載せた想い～

藤原陵平

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

奏でる音の色〜詞に載せた想い〜

【Nコード】

N0728D

【作者名】

藤原陵平

【あらすじ】

詩人の道。それは清らかな山とは思っていないさ。楽器は出来な
いし歌もイマイチ。そんな俺でもバンドというものに興味はあるん
だけ。そこで出会った彼女。幼馴染み。親友。そして残り一人。そ
れは俺の人生を変える為に出来た音のようだ。歌詞、音、人間関係
音楽を中心に周る詩の世界。こんな歌詞、どうですか？

opening 前奏

opening 前奏

俺は詩人を目指している。俳句とかではなく、『音楽』曲の詞だ。生憎、ギターなど楽器類は才能がないせいか、練習しても上達は出来ないでいる。だから、自分で曲を作って歌う事は出来ない。元々、俺はバリバリのバンド好きだ。演奏がないと気が済まない。全く、上手くいかない世の中だぜ。

俺の名前は藤森優斗^{ふじもりゆうと}。高校二年の学生だ。

特に目立った長所もなく、劣りすぎているという部分も無い。普通過ぎる人間なのだろう、と自分でも思う。

今日は二期の始業式。

暑いだけで何もする事の無い夏休みが終わり、これはこれで嫌な学校生活が再び。面白い要素など全くなく、幼馴染みや親友、ましてや彼女などいる訳もなく。いや、幼馴染みはいる。親友もいる。仲が良かった奴は確かにいる。

そんな事を考えながら迎えた新学期。特に特別な出来事もなく、ただ流れていくだけなのだろう。

そう思っていた。

その時が来るまでは……

新学期という事で転校生が来るらしい。担任の岡崎（呼び捨て）が廊下に向かって「じゃあ、入ってきて」と転校生を呼んだ。

そして入ってきて転校生。

ここから俺の人生は変わっていく。夢の道が切り開かれるように。

「転校生の新井由架^{あらいゆか}です。宜しくお願ひします」

その声は淡々としていて綺麗だった。まるでこのクラスなど興味はないと言うような口調、雰囲気。何だこいつ？

これが正に道の入り口だった。俺が変わる原因になった。

後悔はない。この出会いに。

第1小節 Aメロ 1句

第1小節 Aメロ 1句

毎年のように此処『伊勢三崎市』は遅く桜を咲かせていた。

この市にある高校、『伊勢三崎高校』は俺が通っている普通の高校だ。頭が言い訳でもないし、部活も強いと言える部は殆んど無い。将棋部が県大会に行っているくらいだ。

そんなつまらない学校に通っているせいかどうかは分からないが、俺は人生がつまらないと感じるようになってしまった。夢はあるが叶うとは思えない。夢はあるけど……叶えたいけど……自分が生きている場所の立地条件が悪いのか、才能というものが生まれつき備わっていないせいか、叶う気が少しもしない。ああ、俺の人生。残念だな。

そして、今年も始まった学校生活。この学校では二年目。一年の時は何をしていたか覚えていないほどつまらない一年だった。

今年もその繰り返しか……

朝のホームルーム。新学期には必ずと言っていい行事的なサブライズゲストが来る。遠回しに言わない時はこのゲストの事を『転校生』と呼ぶ。

今学期も一人来るそうだ。生徒の間では何処で聞いた事やら、もう噂になっている。

期待を裏切らず可愛い子や格好良い奴がクラスにすぐ馴染める。それ以外はなかなか馴染めず一人の日が続く、転校生というのは大抵この二種類だろう。まあ、俺は好運を祈る。

そして入ってきた転校生。見た目は滅茶苦茶可愛い。

髪の毛は焦げ茶に近い色で、ロングヘアだった。綺麗な髪の毛

だ。顔も綺麗だし、可愛いし、シワもニキビも一つも無い。綺麗な顔立ちだ。

そして、なんといつても綺麗な声。これは圧倒的だった。周りに奴等は全く気にしていないだろうが、俺は感じた。

「これは……」

この声が欲しい。

それが、これからの俺の人生を一気に変える出会いとなった。

その子の名前は新井由架^{あらいゆか}。

席は偶然にも俺の隣。俺は奇跡と信じたいけどね。

早速聞いてみよう。音楽に興味があるかね。

「なあ、隣になったって事でよろしく。俺は優斗っていうんだ。とりあえず覚えといてくれ。それで……いきなりなんだけど、話がある」

「何？」冷めた声？ 嫌な予感……

「音楽とか興味ないか？」

「何それ？ 勧誘？ バンドでもやらせる気？」

「まだそこまで話は進んでないけど……駄目か？」

「もう話し掛けないで」

「なんでだよ！」

それから無言……

俺の計画は途方に暮れるスタートとなった。

Aメロ ずっと君を待っていたよ 出会う事なんて分かっていたのかも

第2小節 Aメロ 2句

第2小節 Aメロ 2句

俺は諦めたりはしない。俺の将来が懸かっている大事な事なんだ。どうしてもあの声が欲しい、あの綺麗な美しい声。どんな言葉だろうと気持ちを一番に届けられる透き通った声、あんな声をしていたらあいつも今までの人生に何かスカウトか何かされたはずだ。恐らく音楽経験はあるだろう。

そんな事を思うと余計にあの音が欲しくなってきた。くそお、何か良い方法はないのか…… そんな事を考えながら終えた荒れた一日。荒れていたのは俺の中の心情だけだけどな。

そして、また新たに希望を胸に潜ませ、学校へと俺は登校する。もしかしたら今日は……と思った俺を誰が責められよう。俺自身だ。まさか朝の一時で俺の一日の希望が粉々に砕けるとはな。

それは、またあの冷たい視線から紡がれた言葉だった。

とりあえず、朝会ったら挨拶くらい普通だろ？ なのにな……

「よお、おはよう」

「覚えてないの？ 昨日、話し掛けないで。って言ったでしょ。

私が吸ってい

る酸素が貴方が出す汚れた二酸化炭素でドロドロに濁るでしょ」

酷い言われようだ…… 転校生に初日からいじめられる人間もあまり、いや、殆んどいないであろう。厳しい……とにかく厳しい……心が削られていく感じがするぜ……俺の希望を知っていないながら「そんなのいい迷惑よ」と言わんばかりに言葉の暴力で俺の希望を叩き傷付けていく。

「貴方が話し掛けてくると、いい迷惑なのよ」本当に言われてしまった……

それから、今日一日俺は孤独に生きるのであった。とは終わらせ

られない。まず、あの声を手に入れるには相当時間がかかるであろう。何かいい手は……

そんな事を考えたまま、結局陽は昇り沈んでいった。ああ、考えても分らない。喋るなんて言われてもな……

そして、一日、また一日と陽は昇り繰り返した。何度由架の顔を見ては睨まれた事だろう……

結論は出ず、仮定すら起こしてない。まだ式すらも……成り立つ事といえば、嫌われている事だけだ……酷いな、俺の人生は雲隠れでもされて雷が鳴り響き年がら年中雨のようだ。

こんな苦労人にもたまには晴れの日をくれてもいいんじゃないですか、神様……

何週間も悩んだ結果、仕方ない。猛アタックしかない。何度も何度も勧誘してやろう。

逃げたつて無駄さ、そうさ、逃げてても無駄だ。この声じゃないと駄目なのだから。今日は頑張ろう！ そう決意を固め目覚めた、転校生来日1ヵ月後。その間一体何をしていたのだから……

登校。席に辿り着くと彼女はいた。肘を机に立てて偉そうに外を眺めている。

いつ、いい度胸じゃないか。こっちの怖さも知らないくせに。

「おい！」

「話し掛けないでつて言ったでしょ。何アンタ？ 記憶でも無くしたわけ？ それは御愁傷様。生憎、私は忙しいの。アンタのお遊びバンドごっこになんか付き合っついていられないの！ 分かった？」

「おい、今遊びつて言っただろ……」

「言いましたよ。それが？」

「こっちは本気なんだよ！ お前みたいは何もしてない内に相手を傷付けて、人の将来を笑って何が楽しいんだ」

クラスメイトがこっちを向く。そりゃそうだよな。クラスの注目の的だよな。

「声、デカイぞ」と周りから苦情が飛んでくる。そんなの知った事か。

由架は席について本を読んでいた。この野郎……

そして昼休み。飯でも食おうと席を立つと、由架が呼び止めてきた。初めてあいつから話し掛けてきた瞬間だった。

「アンタ」

「俺はアンタって名前じゃねえ」

「うるさい！ 呼んでるでしょ。ちゃんと返事しなさいよ」

「何だよ」

「アンタ、そんなに本気なの？」もしかして、興味を持ってくれたのか？

「ああ、かなり本気だ」

「なら、1つ。その条件をちゃんと達したら考えてあげる」

「条件とは？」

「ギター、ベース、ドラム。3人バンドメンバーを集めなさい」

「集めたら考えてくれるのか？」

「まあ、少しはね」

「分かった。集める」

「期間は1カ月。それまでじゃないと受け付けないから」うわあ……

…無茶な事を……

「分かった。待ってるよ」

「やれるものならね」

そして始まったメンバー探し。また、俺に試練が待ち構えている。大変だな。

第3小節 Aメロ 3句

第3小節 Aメロ 3句

さて、メンバー探しといっても簡単に集める事ができる術を残念ながら持ち合わせていない。何かから当たっていけばいいのやら……

だが、その時は突然来た。

「うるせえ！ そんな音楽やつても全然カッコよくねえんだよ！」

「お前達はカッコつける為に音楽やつてるのかよ！ そんなバンド俺から辞めてやる！」

なんだ？ 軽音楽部の部屋から喧嘩の掛け合いが聞こえる。と思つたら1人出てきた。

「おい、どうしたんだ？」

「先輩の方ですか？ 何でもないので平気です。じゃあ……失礼します」

「何か、楽器出来るのか？」

「はい……一応ギターが」

「バンド、やりたいか？」

「今はいいです……今あんな事があつたばかりですから……」

このチャンスを利用してたまるか。せつかく見つけたんだ。こいつの目は確かに音楽家の目だ。逃さない。逃したくない。

「さつき、何があつたんだ？ 良かったら教えてくれよ。ああ、俺は藤森優斗」

すみはらたかあき

「隅原貴明です。実は3年に兄が亡くなって、その兄の友達が多くなつてしまつたんです。だから、元気を出して欲しいから曲で届けられたら、と思つたんですけどバンドのメンバーが『俺達はバリバリのパンクしか興味がないんだよ！ そんなメッセージソング、カッコよくないんだよ！』と言われてしまいました……」

酷いな……バリバリのパンクね。技術がない奴等がやって、ただうるさいだけの雑音バンドだな。しかもメッセージソングは嫌だと？ パンクにメッセージが無いとでも思ってるのか？ それは大いなる勘違いだ。

メッセージのない音楽など存在しない。何かしらあるんだよ。全く、格好をつけたいだけの高校生バンドには分からないか。音楽の深さを知ってから語りやがれ。パンクを嘗めた口で語るな。この野郎。

「隅原だっけ？ 隅原……隅原幸助の弟か？」

「はい。そうです。なんで知ってるんですか？」

「バイト先が同じでな。じゃあ悲劇の主人公は……」

「悲劇ではありません。その本人、古河正晴さんとお亡くなりになられた風愛子さんの間には可愛い女の子が誕生したんです。愛ちゃんという女の子です。確かに正晴さんは落ち込んではいません。愛ちゃんも風さんの両親に預けたまま。だからこそ、元気を出して欲しくて……」

「俺とバンドやらないか？ いやっ、すぐに返事をくれとは言わない。でも考えてくれるか？」

「藤森さんとバンドを組めばメッセージを兄達に届けられますか？」

「少なくともあんなパンク気取りより真面目だな」

「他のメンバーは？」

「生意気なボーカルが1人いる。ちよつと訳ありではあるが……その他はまだだ。でも、貴明が本当に届けたいなら、もうすぐある学園祭でやらないか？ 俺と音楽を」

「じゃあ、そのボーカルの人に会わせてください」

「……分かった」

という事で由架と対面させる事にした。

貴明が事情を説明していると、ん？ 由架が涙目？ 意外とこいつは涙脆いのか？

「おい、由架。泣くなよ……」

「ん？ ああゴメン。ちょっとアクビがね」

今こいつなんて言った？ アクビ？ ああね。やっぱりこいつはこういう奴なんだよな……分かっていたとはいえ、相手に失礼だし俺も懲り懲りだ。

「事情は分かったけど、それと私になんの関係があるの？」

「じゃあ聞こう。由架さんよ、どうすれば学園祭で一緒にやってくれますか？ 貴明だって悪い奴じゃないぜ？」

「それは分かっているわ。少なくとも貴方よりは良い子ね」

「はいはい。どうせ俺は悪者扱いだよ。」

「事情が事情だから。そうね……1曲。学園祭までに出来たらやってあげてもいいわ。その代わり私が歌って恥ずかしくない曲にしなさいよ」

何だよ。案外素直じゃないか。いつもそうしてれば可愛いものになもつたいたい。ああもつたいたい。もつたいたい。

「じゃあ、私は用があるから帰るわ。まあ頑張って」

お嬢様気取りだな。

「綺麗な声ですね」

「やっぱり貴明もそう思うか？」

「はい。恐らく彼女は音楽経験がありますよ。本当に音楽好きなら、あの声の良さが分かります」

「それはそうとして、曲はどうする？ 残念だが俺は楽器が全くもつて駄目だな。作曲は無理だ」

「じゃあ演奏の方はどうするんですか？ それと何故バンドをやろうと思ったんですか？」

「貴明の弾き語りだな。俺の夢は詩人になる事だ。そしてあの声と出会った。これは本気でやるしかないだろ？」

「ごもつともです。じゃあやった事ないから分からないですけど、僕が曲を作ってきます。詞は藤森さんに任せます」

「分かった。頼むぞ」

「はい」

こうしてなんとかチャンスを得た。バンドというか……だけど、明らかに一步を踏み出しただろう。それは確かな一步だ。続くベイス、ドラムを待つ。

学園祭まで、あと2週間。

翌日。なんと貴明は曲を持ってきた。1日で作れたのか？ すこいな。

早速、家に帰りデモテープを聴く。

アコギでアルペジオが始まり、綺麗なメロディーを奏でていく。前奏とAメロ、その区別がはっきりと見える素晴らしい出だし。そしてサビのコード進行。Cメロでの思いきったピッキング。素直な感想をいうと天才を見つけたという結果に繋がる。

こんな身近に天才、才能を持った奴がいたとはな。鳥肌が立つ。寂しいメロディーにも関わらず温かさを感じさせる。『愛』その名に捧げるメロディーとしてはこれ程温かいものはないだろう。凄いな……これは自然と詞が出てくる。

だが、あと2週間で詞を完成させるなど俺にはきつい話だ。いくら詞の構成やらが決まったとしても、まだ微調整や言葉の意味合いの考えをまとめたりしなければならぬ。これは大変だな。

しかも、あと2週間で学園祭という事はそれより前に由架に曲を渡さなければならぬ事になる。頼むぞ俺。

授業中も浮かんでくる詞をメモをしては全体的なまとまりに合うか何度も見直しをした。

あくまで今回は古河正晴さん、風愛子さんの為のものだ。書き下ろしでその助けになる詞を書かなければな。

さあ、もう1週間できつた。

「藤森さん、出来ましたか？」

「ほとんどのテーマ、流れ、メッセージはな。少し手直せば完成だ。俺の感想ではあるが、これは素晴らしい曲だぞ」

「そうですか。楽しみです」

「明日には渡すよ。そうしないと由架の事もあるからな」

「そうですね。頼みます」

翌日。

由架に曲を渡すなんて、度胸がないと出来ない事だな。

放課後、俺達は誰も使っていない資料室に行き曲を確かめていた。歌詞が書いてある紙を渡し、デモテープを流す。

「頼むぞ、由架……」

俺は目を閉じ曲が終わるのを待った。

そして……

「アンタ」

「なんだ？ 何か言いたい事があるのなら言ってくれ」

「学園祭でやるにはエントリーしなくちゃならないわ。早く行くわよ」

「……おう！」

「藤森さん、これって……」

「ああ、良かったな」

「はい」

エントリーも無事済み、いよいよ練習。とりあえず、楽器はギターだけ。歌は由架。実に簡単だ。俺は舞台袖で見守る。ちゃんと作詞は俺だという事を言おう。そうしなければ俺の名が全くの皆無状態で無視される。

それは嫌だからな。

練習3日目。

やはり由架は才能がある人間だったようだ。音程を外す事はまず

ない。声もしつかり地についている。バンドのバラードって感じだ
な。歌い方もしつかりしている。これなら問題がないようだ。
さあ、本番はすぐそこ。

書き下ろし 別れはしないよ 会いたいよ だから また明日空の
下で

第4小節 Aメロ 4句

第4小節 Aメロ 4句

本番当日。

俺達の番は今から行われるくじ引きによって決められる。

この学園祭で行われる『伊勢御崎高校天才発掘音楽祭 第20回』は伝統ある学園祭の定番行事だ。去年は見ていたが、どうもしくりこない人達ばかりでガツカリした。

実際、この音楽祭的行事にはグランプリなどがあり、見事1番になった人達は学校内ではあるが、CDの配布が許されている。

去年、グランプリに輝いたバンドのCDを俺も受け取ったが、ズタズタですぐに放り投げてしまった。まだ家にあるかな……。まあいい。

とりあえず、今からくじ引きだ。引くのは勿論？ 勿論？ 由架が紙の入った箱の前に立っていた。そして、引いた番号。いやあくこいつは何か持つてるね。才能以外の何かをね。大トリだよ。12組中12番。やられたな……。まあ俺には関係無いか。演奏自体はしないし。

リハーサルも終わり（立ち位置決めだけ）、俺達はそれぞれ学園祭を楽しむ事にした。

その時間。

貴明は、兄の隅原幸助、委員長の橘瑞希、そして、古河正晴を音楽祭に呼んでいた。「どうしても来て欲しい」と、何度も頼んだ。

音楽祭スタート。

軽音部のバンドや諸素人のバンドなど数々のバンドが自分達の出

来る限りの演奏を披露していた。
そして、今ステージに居るのは11組目。
次は俺達の番だ。

大トリ、エントリー番号12番が呼ばれる。

「よし、頑張つてこい！」

「はい！」

「私は歌うだけだけどね」

アナウンス

「エントリー番号12番。メッセージがあるそうです。ギターを担当する隅原貴明さんから『愛を忘れないでください。この曲は貴方達の為に僕が作曲し、藤森優斗さんが詞を書いてくださいました。聴いてください』では、どうぞ！」

愛の花言葉

大切な人を無くしても 出会った歴史は確かにあつて

大切な人を泣かせても 涙の歴史は貴方にあつて

同じ色をしていても 同じ意味は1つもなくて

違う形をしていても 同じ意味の『愛』であつて

貴方が授かった名前

それは一つしかない 花言葉

無くさないで いつだって貴方の側にある
散った花びらが 残した愛の花

忘れないで 二人で見た空がある事

色は忘れても 一緒に見た事を 忘れないでください

あの人が残してくれた 生きる意味の分 返さないと
あの人が与えてくれた 優しい笑顔の分 返さないと

大切な人と得た思い出

この世に一つしかない 宝石箱

泣かないでね 貴方が居た歴史は確かにある

あの人の心にも 貴方の心にも

笑っていてね 二人で居た証拠は確かにある

二人で見上げた空を 思い出として 残してください

君に会いたい だから 明日また空の下で

君を待っている だから 明日また空の下で

同じ時を過ごした分

同じ想いは溜まっていった

二人分の 宝石箱に

無くさないで 大切な人に貰った優しさを

忘れないで いつも 一緒に居た事を

どうか 忘れないでください

無くさないで いつだって貴方の側にある

散った花びらが 残した愛の花
忘れないで 二人で見た空がある事
色は忘れても 一緒に居た事を 忘れないでください

大切な人に貰った 愛の花言葉を
忘れないでください

俺はこの詞を書くにあたって、古河正晴さんにその事実を全て聞いていた。勿論、曲を作るとも言った。相手は乗り気ではなかったが、涙を流しながら話してくれた。

聞いていたら、なんだよスゲエ悲しい話じゃん。ドラマチックであるし。確かに悲劇と言ってはいけないな。

正晴さんはもう就職も決まっていて、高校はとりあえず卒業するまでいるらしい。赤ちゃんが大きくなったら思い出の場所に行くのが夢だ、と言っていた。叶う事を心から願おう。

曲が終わった。

静まり返った体育館の中。2つの拍手が響いた。立ち上がったの拍手を送ってくれたのは、涙を流しながら笑顔でいる橋瑞希さんと隅原幸助さんだった。

そして、もう1人立ち上がる。古河正晴さんだ。正晴さんは真っ直ぐ前を向き、笑顔で拍手を送ってくれた。

結果発表。

ベスト・オブ・ロックは貴明が所属していたパンク気取りバンド。他にもいろいろは賞があった。俺達の名前は呼ばれず、最後の賞。

グランプリの発表。

驚いたね。普通ならドラムロールとかライトが右往左往したりするのにな、その名はすぐ呼ばれた。

「グランプリは文句無し！ 感動を与えてくれた『愛の花言葉』です！ 皆さんもご存知のあの出来事を力強く後押ししてくれる素晴らしい曲でした！」

そういう事で変なトロフィーとCD配布許可権を頂いた訳だ。というか、正晴さんの出来事は皆知っていたのか。俺が由架に話し掛けようと苦労していた時に広まったのだろう。可哀想だな、正晴さん。

「この曲のCDが欲しいという方は……」

「待つてください！」 貴明が大きく叫んだ。

「この曲はCDには出来ません。これは僕の兄や橘さん。何よりも古河正晴さんと風愛子さんの為に作った曲です。皆さんに支持して頂いた事はとても嬉しいです。でも、そういう扱いに出来る曲ではないので……」

「ごもつともだな。作詞者としても正晴さん達だけの事を思っていた詞だ。今日、此处で届けられただけで、もういいんだよ」

そう。その通りなのさ。

実際は音楽祭だろうがグランプリだろうが、そんなものはどうでも良かった。

ただ、届ける為にある唄だ。だから、メッセージなんだよ。貴明が届けたかったメッセージなんだよ。ただ、それだけの話だ。大事にする必要もない。

「……それでは、CD化は今年は無いですね。しかし！ 素晴らしき曲を届けてくれた、この3人に拍手！」

パチパチ、パチパチ……

「藤森さん」

「なんだ？」

「僕はまだバンドがやりたいです。音楽に関わりたいです。今日、この人達なら何か出来るかもしれない。そう感じました。駄目でしょうか？」

「本当か？ それは有難い。ただ、初めから悪いんだけどさ……」

「何ですか？」

「あと1週間くらいでベースとドラム見つけないと由架と一緒にやってくれないんだ……」

「……マズイですね……」

「ああ」

そう。やはりその事実は変わらないのだ。いくら今回は由架が歌ってくれたとはいえ、バンドとしてしっかりやるなら、あと2人必要だ。

もう日数は殆んど無い。真剣に考えている時間もないか。片っ端から当たる時間も無いか……

そうとなれば……

知り合いに当たろう。

それしかない。

第5小節 Bメロ 1句

第5小節 Bメロ 1句

幼馴染み。その関係をご存知であろうか？

幼い頃から馴染みのある相手の事を指す、正にそのままの言葉だ。俺にもそのような関係に当たる人間がいる。

だが、ここ数年全く口を聞いていない。何故かというと、まあ親同士の喧嘩が原因だろうと俺は考えている。全く、困ったもんだな話をちゃんと出来るかも怪しい状況だよな。俺は不幸人なのだろうか……いいや、でも由架や貴明に会えた事を考えると幸福者なのだろう。そこは俺もそう思う。

学校生活は今日も問題なく回る。平凡すぎて騙されている気分になる。こんな生活を送っていていいのだろうか……そんな事を考えるようにもなった。

授業はいつも通り手につかず、どうしたものか、と脳を回転させて考えた。だが、これといって納得のいく素晴らしい考えは思い浮かばず、ただただ時間が俺を見て笑うように過ぎ去っていった。

幼馴染みもそうだが、親友、という存在をご存知であろうか。

最も親しい友達で親友。皆さんにはそんな人物がいるだろうか。

さて、俺にも親友はいる。

親友はいるけど……しかも楽器も出来る。俺がギターを始めた時、一緒にベースを始めた奴がいる。

何故すぐにそいつを誘わないのだった？ それにはいろいろ理由があるのだよ、皆の衆。

その親友の名前は新島雅人。にいしままさとちなみに隣のクラスに在籍中で、俺のクラスにいる花崎美雪はなさきみゆきという女の子に恋をしている。

少しは察してもらえたかもしれないが、こいつは恋愛大好きで女好きな健康男子だ。それも理由の一つだが、もう少し肝心な理由が一つある。

ラブソングというものしか聴かない人間なのだ。乙女心というものを知りたいらしいが、端

から見ればちよつとした変態だ。しかもヒットチャートのトップ10に入ったベタベタでミーハーなラブソング限定。俺から見るとさすがにそれは気持ちが悪い……

しかし！ そんな奴すらも呼ぶしかないほど、俺はピンチ、崖っぷちなのだ。幼馴染みは少し置いといて、親友というものに頼ってみよう。仕方なく……

昼休み。

俺は食堂に行き、雅人に話し掛けた。

「よお、雅人。久し振りだな……」

「おう、優斗！ なんか話でもあるのか？」

「そうなんだけどさ……お前まだベース弾けるか？」

「一応、基本くらいは出来ると思うぞ。何でだ？ バンドか？」

「分かってくれると話が早いな。っでどうだ？」

「ラブソングか？」

やはり来たか……分かっていた事とはいえ、どう言い返したら良いものか……

「ラブソングはもちろんあるぞ！ 当たり前だろ」

実際の所、ラブソングは1番の苦手分野で書く事は出来ないだろう。だが、そんな事を言っではいられない。何故なら今、俺はチャンスを目の前にしているからだ。

「じゅあ、考えといてやろうかな？親友の頼みだしな」

「ああ、頼むよ」

なんとか此処までは漕ぎ着けたぞ。あと1人も誘わなくては……

幼馴染み、そいつを誘うのは大変な話だ。
だが、そんな事は言ってもらえない。猫の手も借りたいほど困っているのだ。

放課後。

幼馴染みこと榎悠太まきゆうたは雅人と同じクラスに在籍中で、部活もしていない。だから、捕まえるなら放課後の今だ！

「悠太！」

「……優斗か。なんだ？」

「いやあ、あのさあ……」

話しくいのも当たり前だ。

俺達は昔、親同士もそうだが俺達同士も喧嘩をしてそれ以来だからな。

これはとても悲しい話。

悠太が「好きな奴が出来た」と恋愛の相談をしてきたのだ。黙って聞いてやると、そこで事件は起きた。まあご察しの通り、同じ相手を好んでいたのだ。俺もその子が好きだった。今じゃもう好きだった女の子の名前すら覚えているか怪しい感じだが。

「お前、まだ怒ってるか？」

「……いいや、もう終わった事だから気にしてない」

そう。もう終わった話なのだ。お互い好きだった女の子は転校してしまい、お互いが泣く事となった。

「優斗、俺もう行っていいか？ ちょっと用事があるんだよ」

「ああ、悪いな」

「じゃあ」

怒ってないと知っただけでも収穫としよう。

そんな事を考えながら、下駄箱に上履きを入れ玄関を出ていくと、ラブソング野郎がそこにいた。

「優斗！ バンドって女の子にモテるか？」

「しつかりやってれば、カッコ良く見えるぞ」

「そうかあゝそうだよなゝっで、考えたんだけど、明日までにさ、俺が食いつくようなラブソングを書いてきてくれよ。それで考えてやる！」

「お前……今何て言った？」

「だから、ラブソング！俺へのラブソングを書いてきてくれ！」

「なんで雅人宛てなんだよ」

「まあ、いい詞を待っているよ、優斗君」

そして、そいつは軽快なリズムを足音で奏でながら走っていった。ふざけるなよ、この野郎。

ラブソング……書けない……

悩んでも、考えても、浮かんでこない……

どうする俺……

そして、翌日。

「優斗！ちゃんと書いてきたか？」

俺が教室目指して廊下を歩いていると、奴に会った。

「ああ、感謝しろよ。ほら」

俺は大学ノートの切り取った1ページを奴に渡した。

「サンキュー！じゃあな」

失礼な奴だ。人に頼み事をしてそれが果たされたらすぐ逃げているのか。なんて野郎だ。全く、嫌な奴だな。

俺があいつに渡した詞。

それは、確かに俺が書いたラブソングだが、たった5分くらいで書いた適当な物。

ただ、好きだとか愛していると書いただけの物だ。実際にこれ。

『マイ ハニー』

ずっと 待ってる 君の足音が 鼓動のリズムと 解け合う瞬間を
此処で 聴いてる 君の歌声が 鼓動のリズムと 絡み合う瞬間を
ずっと 待っている

もっと 近くに 君の心臓が 僕の右胸に 重なる瞬間を
もっと 静かに 耳を澄ませて 二つの鼓動が 響く瞬間を

ずっと 待っている

マイ ハニー 誰よりも愛しているよ
一度だけでもいいから 微笑んでおくれ
マイ ハニー 君の事が好きだよ
誰かではない 僕だけを 愛しておくれ

いつも 遠くで 君の姿を 僕の思い出に スケッチしている
いつも 笑って 可愛い君を 眺めている 初恋の目をして

綺麗な 横顔を

マイ ハニー 誰よりも愛しているよ
僕だけを見て欲しい 気付いておくれ

マイ ハニー 君のことが好きだよ
「今か今か……」と 僕の気持ち 分かっておくれ

だんだん 近くなって 夢見ているみたい
とんとん 好きになって 今夜も また 夢で会えるね

マイ ハニー 世界で1番愛しているよ
こんな曲があるって 気付いておくれ
マイ ハニー 世界で1番好きだよ
宛名の無い 僕の手紙 受け取っておくれ

マイ ハニー 誰よりも愛しているよ
一度だけでもいいから 微笑んでおくれ
マイ ハニー 君の事が好きだよ
誰かではない 僕だけを 愛しておくれ

世界中で 僕だけを 愛しておくれ
マイ ハニー……

書いている時、自分でも笑ってしまった。
なんだこれ！ って。面白くてね。うわあ、気持ち悪いなあ〜と
か思いながらもなんとか書き終わって、また笑った。本当に鳥肌モ
ノの気持ち悪さだったな。
さて、雅人の反応が楽しみだ。

翌日。

俺と貴明が屋上で昼食を食べていると……

ガチャ。

「探したぞ、優斗！」

「なんだ雅人か……なんだそれ？」

「どうもごうもねえよ！ これはベースだ！ さあ、やるぞバンド！」

「そ、そうか……」

「何だそのやる気は！ 本気でやるからな！」

「ふ、藤森さん？ この方は？」

「俺の友達だ……」

「どうしてベースを？」

「それは……」

以下、省略

「そうなんですか！ それは良かった。でも、その詞ってどんな詞ですか？」

「後で読ませてやるよ」

「はい」

「何ぐちゃぐちゃ言ってやがる！ 練習だ、練習！」

こうして、また一人。メンバーが増えた。まあ、嬉しい事は嬉しいけどな。

この期間、由架は俺と貴明の事を他人のようにシカトしてきた。あと一人だ。狙いはもう決まっている。待ってるよ、由架！

あの詞を貴明に見せたところ、笑われて「藤森さんじゃないみたいですね」と言われた。

奏でる音の色～詞に載せた想い～

間奏 終止符

間奏 終止符

榎悠太^{まきゆうた}。次のターゲットの名だ。

話すにも話しにくい関係に置かれている状況だが、そんなのを気にしていられるほど時間は残されていない。悠太も俺の事を考えてくれていたら良いんだけどな。

放課後、その時は突然来た。

「優斗」

俺を呼ぶ声が聞こえて、履こうとしていたスニーカーを手に持ち後ろを振り返った。そこには悠太が立っていた。少し不安が混じった顔をして俺を見ている。

「ど、どうした？」

「今更、悪いとは思ってるけど、俺はやっぱりお前と目指してみたと思う。覚えてるか？ 俺達がガキの頃にした約束」

約束……そんな物結んでいただろうか。記憶の端から端にも無いようだ。きつと隠れているに違いない。なんだ？ 約束……

「俺はやっぱりあの約束を果たしたい。だから、もう一度、お前の側に寄っていいか？」

「あ、ああ……」

仲直り。という事にはなるのだろう。だが、問題はそこじゃない。こいつが一体、何の話をしているかだ。聞き覚えの無い約束。本人に聞くか？ いや、それは失礼なのは。

「そういう事だから。じゃあ、俺用事あるから、じゃあな……」
行ってしまった。気になったままにしておくというのも嫌な気分だな。スッキリしない。もやもやしている。

約束……

幾ら考えても浮かんで来ないで悩みに悩んでいる今宵の夜。
もう諦めようとも思う。気を紛らわす為に手にした本は積み重なり、小さなタワーがそこには完成していた。思い出とは時に役立たずだ。

ピンポーン。

俺を呼ぶチャイムだ。俺の家に来る人間なんてほとんど居ないはずだけどな。誰なんだ。こっちは少し考え事で頭がいっぱい……

「よお、優斗。久しぶりに来たって感じだな」

「どうした、悠太？ 何か用事でもあるのか？」

「言っただろ。約束を果たしたくなっただって」

「ああ……いや、その事なんだけどさ……」

言おう。言っただけじゃあ！ もう言わない時が済まないぜ。

「悪いんだけどさ、約束って何だっけ？ ずっと考えてたんだ、でも幾ら考えても思い出せなくて。ちょっと聞けばすぐ思い出すと思う。ごめん……」

「そうだろうと思ったよ。だから、あの時の証拠を持ってきた」

「何だこれ？」

それは1冊のノートだった。普通の大学ノート。これが約束の物か？

「中見てみるよ。すぐ分かると思うぜ」

言われた通りにしてみる。表紙を開けたその時、その約束は今結んだ事のようにこの場に舞い降りた。

「……思い出したよ。これを叶えたいってか？」

「ああ。俺は本気だ」

「またまた、タイミングがいい奴だな。俺も今これを目指してるところでな。お前が来てくれれば、完成だ」

「よし。ついに、だな」

「ああ」

そのノートの中に書いてあった文字。バカみたいに汚い字だけど、確かに俺の字だった。その文章は契約書のように書かれていた。

『榎悠太殿。貴方は俺と音楽界を変える義務がある。従え、ここにサインしろ』

と、脅迫状にも見えそうな文。そして、書いてあった悠太のサイン。

「分かったよ。悠太、変えようぜ。こっちはそれが出来そうな作曲家と歌い手がもう付いているからな」

「ああ。それは分かっている。見たぜ、学園祭のステージ。あの二人だろ？ 確かに才能の塊だ」

「ああ」

「やろうぜ。変えてやろう」

「ああ。変えよう」

この約束で俺は本当の一步を出せるようになった。

「と、言う事だ。由架、約束は守ろうな」

「仕方ないわね……約束は約束だもんね……」

「一つ聞いていいか？」

「一つなら」

数限定するなよ。

「お前はまさか、最初から俺達とやりたいと思ってたんじゃないのか？」

「そんな訳無いでしょ。さあ、決まったんなら早く行きましょう」

「何処へだ？」

「メンバーの所よ」

「ああ。そうだな」

その顔は、俺には輝いて見えた。

奏でる音の色～詞に載せた想い～

間奏 終止符（後書き）

これからが、本作の始まりです。
このタイトルでの連載はこれで終わります。そして、本編の話はまた次の投稿で。これから始まる優斗や由架達の青春を期待して待っていてください。ここまで読んでくださり、ありがとうございます。では、また本編で……

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728d/>

奏でる音の色～詞に載せた想い～

2009年3月24日09時01分発行